

<研究ノート>

## デイルタイと自叙伝

小松 進\*

### Dilthey and Autobiography

Susumu KOMATSU \*

#### 1. はじめに

ヨーロッパにおいて自叙伝という文学ジャンルへの知的探求が始まったのは18世紀の啓蒙の時代であると言われるが<sup>1)</sup>、このジャンルが広く世人の関心を集めさかんに学問的分析の対象とされるようになるのは19世紀後半以降のことである<sup>2)</sup>。この時代に自叙伝研究がにわかに活況を呈するのには決定的な役割を演じたのが、ヴィルヘルム・デイルタイ (Wilhelm Dilthey 1833～1911年) であった<sup>3)</sup>。

周知のように、デイルタイはニーチェと並ぶドイツにおける生の哲学の創唱者の一人であるが、デイルタイが生哲学へと導かれるのは、精神科学を自然科学から区別し、精神科学の本質を闡明するという作業の過程においてであった。この作業は、『純粹理性批判』において自然世界への認識論を展開したカントに対して、人間やその社会、とりわけ精神的・歴史的世界の認識がいかに可能かを問う歴史的理性批判の企てに連なっていく。こうしたデイルタイの哲学的営為において、自叙伝は人間世界に固有な生を理解する最も重要な手がかりとして高い評価を与えられる。

デイルタイはこう述べている。

自叙伝はわれわれに生を理解させてくれる最高にして最も示唆に富む形態である<sup>4)</sup>。

こうした自叙伝に対するデイルタイの評価こそが、今日に至る自叙伝の理論的、歴史的研究の隆盛の端緒となった。とりわけドイツにおいては、デイルタイ哲学の直接の影響の下に自叙伝研究が開花し、それはデイルタイの高弟にして女婿であるゲオルク・ミッシュ (Georg Misch) の記念碑的な壮図とも言うべき『自叙伝の歴史』<sup>5)</sup>に結実する。

ところで、デイルタイが自叙伝に着目しそれを哲学的思索の中心に据えたのは生涯の最晩年のことであり、自叙伝に関する記述が集中して現われるのは未公開の草稿として遺された『精神諸科学における歴史的世界の構成に関する続編草案』<sup>6)</sup>においてである。本稿では、この遺稿を読み解きながら、デイルタイが自叙伝をいかに理解し、なにゆえ自叙伝に並外れた高い評価を与えたのか、すなわち、上に引用したデイルタイの言説の真意は

\* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

どこにあるのかを明らかにしていきたい。なお、『続編草案』は、その表題が示すように、それに先行する『精神諸科学における歴史的世界の構成』と題された論稿を前提としている。この論稿自体には自叙伝に関する特別な言及や考察があるわけではないが、これら二編の論稿は同じデイルタイ最晩年の思想の結晶であり、相互に補完し合うものと考えられる。そこで、本稿では、『続編草案』の記述を中心として自叙伝に関するデイルタイの思索内容を検討するが、その理解に必要と思われる場合には、随時、『精神諸科学における歴史的世界の構成』の内容にも触れていくことにする。

## 2. デイルタイにおける自叙伝の定義

デイルタイの自叙伝に対する評価を検討する前に、デイルタイが自叙伝をいかなる性質の文学形態と考えたかを明らかにしておく。デイルタイは自叙伝をこう定義している。

自叙伝とは、人間が自己の生の過程 (Lebensverlauf) について、文筆で表現した自己省察 (Selbstbesinnung) に他ならない<sup>7)</sup>。

個人が自己の生の過程 (Lebensverlauf) について加える…省察 (Besinnung) の文学的表現が自叙伝である<sup>8)</sup>。

まずこの定義によって、自己の生の過程に関する自己の省察である自叙伝は、「他人の生の理解の文学的形態」<sup>9)</sup>としての伝記から区別される。ただし、これらの定義に現われる「文筆で」(schriftstellerisch)と「文学的」(literarisch)という修飾語が、自叙伝を他の文学ジャンルから区別する明確な徴表となりうるかは疑問である。自己の人生に対する自

己省察の文学的表現ならば、デイルタイ自身が指摘しているように<sup>10)</sup>、古代ギリシアの賢人ソロンの詩句や、ストアの哲人の自省録や、聖人の瞑想録や、近世の人生哲学などのような形態もあるからだ。デイルタイは自叙伝の代表としてアウグスティヌスの『告白』、ルソーの『告白』、ゲーテの『詩と真実』を挙げているが、これらの自叙伝と自省録や人生哲学などの文学形態とはいかに区別されるのか。デイルタイの自叙伝に関する定義はこの点が曖昧である。

このように文学ジャンルの定義としては不十分であると言わざるを得ないが、自叙伝に関するデイルタイの定義の背後にはデイルタイ晩年の思想が込められている。その思想内容を知ることなしには、この定義の本来の意味も、デイルタイが自叙伝に高い評価を与えた理由も理解できないであろう。デイルタイの定義でとりわけ検討を要するのは、「生の過程」(Lebensverlauf)と「自己省察」(Selbstbesinnung)もしくは「省察」(Besinnung)という概念である<sup>11)</sup>。デイルタイはこの二つの概念に特別な意味を込めた。それはデイルタイの生の哲学の根底に関わる重要な概念なのである。

## 3. 「生の過程」(Lebensverlauf) という概念について

「生」(Leben)という概念はデイルタイ哲学の核心をなすが、この概念と「生の過程」(Lebensverlauf)という表現をデイルタイは自らの思想を展開する上で厳格に使い分けている。

まず、デイルタイは「生」という概念を簡潔にこう定義する。

生とは外的世界の条件の下に人と人との間に成立する相互作用の連関である<sup>12)</sup>。

この定義から明らかなように、デイルタイは「生」という表現の適用をもっぱら人間の世界に限定している。それは、たとえば有機物の世界全体を貫く生命原理、あるいは無機的な自然の世界をも支配する宇宙原理というようなものへ拡張されることはない。デイルタイにとって「生」とは、空間と時間の秩序 (raumzeitliche Ordnung) という外的世界に制約された人間世界のみ固有な現実であり、この「生」を把握することこそが自然科学とは区別された精神科学本来の課題なのである。

ところで、「生」という表現を用いる際にデイルタイの念頭にあるのは、個人としての人間ではなく、人間一般、人間世界全般である。「生」とは人類全体を包括する普遍的概念である。それに対して、ある特定の個人の「生」、あるいは人間ひとりひとりの具体的な「生」を問題とする際にデイルタイが用いるのが、「生の過程」という表現なのである<sup>13)</sup>。個人の具体的な「生」の表現なのだから、「生の過程」は、「生涯」もしくは「人生」という言葉と置き換えることも可能であろう。

「生」が連関であるように、この「生の過程」も一つの連関をなしている。その連関の結び目、それを構成する要素が、諸々の体験である。こうした「生の過程」のあり方を、デイルタイはこう述べる。

生の過程は諸部分から成り、互いに内的に連関し合う諸体験から成る。一つ一つの体験も一つの自己に関係し、その部分をなす。それは構造により他の諸部分と一つの連関へと結び付けられている<sup>14)</sup>。

ここで「体験」(Erleben ないしは Erlebnis) という概念が用いられているが、この概念はデイルタイの思索の出発点をなす。なぜならば、デイルタイにおいて、「体験」とは人間存在に直接与えられている根源的な現実であ

り、この現実の背後に遡りうるものが何一つない唯一の实在であるからだ。すなわち「体験」から切り離され、「体験」の基底にあってその内容を担う自我や主観などは存在しないということである。「体験」においては、心的なもの物質的なもの、主観と客観は未分化であり、「体験」からの抽象化によって<sup>15)</sup>、思惟によって、それらの区別は生じるのである。

体験は底を究めることができず、いかなる思惟も体験の背後にたどり着くことはできない。認識それ自体が体験においてのみ現われ、体験についての自覚はつねに体験それ自体とともに深められる<sup>16)</sup>。

このように「体験」は人間にとって直接の現実ではあるが、しかし「生」そのものではない。「生」は時間の中で流れ去る経過であり、实在性に充たされた瞬間としての現在の休みなき前進である。こうした時間性こそが生の実体をなす。

我々の生という船は、いわばたえず押し流す流れに運び去られていく。我々がこの流れに漂い、苦しみ、思い出し、望みを抱くところ、つまり我々が我々の实在性に充たされて生きるところのどこにでも、常に、現在は存在する。しかし、我々はたえずこの流れに運び去られていくのであり、未来のものが現在のものになる瞬間に、現在のものもまたすでに過去へと沈んでいく<sup>17)</sup>。

こうした絶えざる流れとしての「生」は認識されることも、体験されることもない。

我々が時間を観察しようとすることによって、観察は時間を壊してしまう。なぜならば、観察は注意によって固定してしま

うからだ。観察は流れるものを停止せしめ、生成するものを固着させる。我々が体験するのは今しがたあったものの変化であり、かつてあったもののこうした変化が起こったのだということである。しかし流れそのものを体験するわけではない<sup>18)</sup>。

「生」は認識によって固定化=対象化されえないのだから、人間にとって「生」は常に不可知な謎として止まる。しかし、その一方で、「生」の流れは一つの連関をなし、その連関を構成する要素が「体験」である。上に引用したとおり、現在が絶えず流れ去る瞬間であり、過去と未来の単なる切断面にすぎないならば、人間はこの現在を体験することができない。だが、人間が現実生き、体験する現在は、単なる空虚な瞬間ではなく、実在性に充ちている。この実在性に充たされた現在が、デイルタイの「体験」に他ならない。それは、我々が「苦しみ、思い出し、望みを抱く」場であり、現在を中心に過去と未来を包括する統一をなしている。

我々が現在として体験するものは、今しがた現に存在していたものの想起をいつも内に含んでいる。他のさまざまな契機のうちで、過ぎ去ったものが現在に力として作用し続けること、それが現在にとってもつ意味 (Bedeutung) が、想起されたものに現存という独特な性格を分かち与え、その現存によって想起されたものは現在に引き入れられる。こうして時間の流れの中で、単一の意味 (Bedeutung) をもつことにより現存における統一をなすものは、我々が体験と呼びうる最小の単位である<sup>19)</sup>。

我々が生きうる唯一の時間は現在であるが、しかし過去は想起というかたちで現在に組み入れられ、その一部をなすというのである。さらに未来もやはり現在と関連している。

ひとり生においては、現在は想起において過去の表象を含み、また、未来の可能性を追い求める想像において、あるいはその可能性の下に目標を設定する能動性において、未来の表象を含んでいる。だから、現在はさまざまな過去に充たされ、未来を自らの内に孕んでいる<sup>20)</sup>。

このようにデイルタイの「体験」は現在に属しながら、そのうちに過去と未来をも含む統一である。この統一としての諸体験が結び付けられて一つの連関をなすのが「生の過程」である。では、これら諸体験を連関へと結び付けるものは何か。

生の諸部分が中断する出来事により互いに分かれていた場合であっても、生の過程にとって共通な意味 (Bedeutung) により結び付けられた諸部分をさらに大きく包括した一つ一つの統一を我々は体験と呼ぶ<sup>21)</sup>。

諸々の体験を結合するのは共通の「意味」 (Bedeutung) であり、デイルタイにおいて「意味」とは生の諸部分が全体に対してもつ関係を表わす。したがって、「生の過程」とは、過去・現在・未来を包括する統一としての諸体験が共通な「意味」によって結合された一つの連関ということになる。

#### 4. 「自己省察」 (Selbstbesinnung) という概念について

「自己省察」という表現は、デイルタイが精神科学を自然科学から区別し、その本質を闡明する際に用いる概念である。精神諸科学は人間という事実を共通の対象としているが、たとえば生理学も人間を対象とし、生理学それ自体は自然科学である。だから扱う対象によって精神科学と自然科学が区別される

わけではない。その区別が生じるのは、人間に対する態度、人間を学問的対象として扱う傾向による。自然科学においては、人間の直接的な自然体験、自然に対する生き生きとした感情が、空間、時間、量、運動の関係に基づく自然の抽象的な把握の背後に退けられる。こうした人間のいわば自己疎外によって、自然という世界を法則的秩序として構成するところに自然科学は成立する<sup>22)</sup>。これに対して、精神科学に顕著でその本質をなす傾向が「自己省察」なのである。

この傾向は自己省察への傾向であり、それは外から内への理解 (Verstehen) の歩みである。この傾向はあらゆる生の表出 (Lebensäußerung) を用いて、それを生み出した内なるものを抱えようとする<sup>23)</sup>。

デイルタイにおいて「自己省察」とは、抽象的な概念ではなく現実に体験されうるものへと復帰することである。その復帰は、感覚に与えられた外なる現象から、感覚には属さないがその外なる現象を生み出した内なるものへと遡ることによって実現する。外なる感覚的現象をデイルタイは「生の表出」 (Lebensäußerung) と呼ぶが、それは「生の客観態」 (Objektivierung des Lebens) とも表現される。「生の客観態」には、言語、身振りや作法、芸術作品、宗教や哲学、法や制度、さらには国家など人間世界のさまざまな現象が含まれるが、こうした「生の表出」もしくは「生の客観態」を対象とするのが精神科学であり、これら感覚に与えられた現象の背後にあってそれを生み出したもの (= 精神) を把握する行為が「自己省察」である。ただし、デイルタイにおいて「自己省察」は「理解」 (Verstehen) という表現と意味が同じであり、むしろ「理解」という概念を彫琢することによってデイルタイは精神科学の本質を規定しようとする。

人間が知覚と認識によって捉えられるなら、人間は我々にとって物理的事実であり、もっぱら自然科学的認識の対象となるにすぎないであろう。しかし、人間の状態が体験され、それが生の表出に表現され、この表現が理解される限りにおいてのみ、人間は精神科学の対象として成立する<sup>24)</sup>。

ここでデイルタイは認識 (Erkennen) と理解 (Verstehen) を相対立する概念として用い、両概念において人間を把握する方法の違いのうちに、精神科学を自然科学から分かつ決定的な徴表を見出す。デイルタイにおいて、「理解」とは「生の表出」を対象とし、それに自己の体験を移入 (追体験) することによって「生の表出」の内にあるものに迫っていく過程であり、したがって、精神科学とは、「生」、「体験」、「表現」、「理解」の連関を根底として人間及び人間世界を把握する科学と定義される。

## 5. デイルタイによる自叙伝評価

「生の表出」を介してその背後にあるものを理解するという精神科学独自の手続きを、デイルタイは、人が自ら自身を知ろうとする時、つまり自己理解の場合にも適用する。人は知覚 (Innewerden) によって現在の自己を意識し、想起によって過去の自己を把握するが、こうして捉えられた自己の状態を固定しそれに注意を向けるだけの自己認識 (Selbsterkenntnis) という内観的方法 (introspektive Methode) には限界があり、この方法では人は完全な自己理解に至らない<sup>25)</sup>。この場合にも、「生の表出」を通じて理解するという迂路が必要なのである。

自らの行為、固定された自らの生の表出、それらが他人に及ぼした影響、それらのみが人に自己自身について教える。こう

して、人は理解という迂路を通じて自己自身をはじめ知るのである。我々がかつて何であったのか、我々はいかに成長して今あるものになったのかを、我々がいかに行動し、かつてどんな生活設計を立て、いかに仕事に励んだかということから、あるいは、忘れ去られていた古い書簡から、我々に対してはるか以前に述べられた評判から知るのである。要するに、生がその深みまで解き明かされるのは理解という過程によってであり、他方で、我々が自分自身と他人を理解するのは、もっぱら我々自身の体験した生を自分と他人の生のあらゆる表現に移入することによってなのである<sup>26)</sup>。

人が自分自身を十全に理解するのは、自己の内面への凝視という周囲の世界から切り離された孤独な静止状態においてではなく、具体的な行為という活動状態において、他人との相互交渉の中で、外部の感覚世界に刻まれた「表現」を通じてなのである。こうした理解の仕方によって、孤独な単独者の内面観察が持つ視野の狭さは克服され、人と人との相互作用の連関としての「生」の中で自己の姿が浮き彫りにされる。そして、自叙伝こそは、ディルタイにとって、こうした自己理解のあり方を如実に示す典型的な形態なのである。

ディルタイの定義では、自叙伝とは自己の「生の過程」に対する「自己省察」であった。上述のとおり、「生の過程」とは諸体験の連関であり、「自己省察」は理解と同義である。つまり、自己の諸体験の連関としての「生の表出」の上に加えられた自己理解が自叙伝に他ならない。精神科学の本質をなす、「生」、「体験」、「表現」、「理解」の連関が自叙伝においても見て取れる。ところで、この自叙伝において、こうした連関はきわめて特異なあり方をしている。理解する者と、理解される対象たる「生の表出」を生み出した者とが同

一人物なのである。この点にこそ、ディルタイが自叙伝に着目し格別高い評価を与えた根拠がある。

自分の人生の歴史に連関を求めようとしている当の本人が、自分の人生の価値として感じたもの、人生の目的として実現したもの、人生設計として企てたもの、すなわち、過去を振り返って見れば自己の発展過程として、将来を望み見れば自己の人生の形成方向とその最高善として捉えたものすべてのうちに、さまざまな観点から自分の人生の連関をすでに形づくってきたのであり、その連関がいま語られようとしているのである。その人は、想起において、意味深いものとして経験した人生のさまざまな時点を取り上げて強調し、その他の時点を忘却の淵に沈むに委ねる。さらに、その時点の意味を取り違えたとしても、その後の人生がそれを正してくれる。かくして、歴史の連関を把握し叙述するという差し当たった課題は、自叙伝においてすでに人生それ自身により半ば解かれてしまっているのである<sup>27)</sup>。

自叙伝に綴られるのは語り手が体験したさまざまな出来事であるが、すべての出来事ではない。語られるべき出来事の取捨選択が行なわれる。自叙伝に語られるのは、諸体験の総和ではなく、諸体験を結び付ける連関なのである。この連関は「意味」によって見出される。ディルタイにおいて「意味」とは全体に対する部分の関係を表わし、自叙伝に関して言えば、「生の過程」全体に対する諸体験一つ一つの間接的関係を表わす。他人の人生を扱う伝記作家ならば、語られる対象者とは無関係に「意味」を定め、この「意味」に基づいて、対象者の諸体験を結び付ける連関を作り出す。ところが、自叙伝においては、「意味」を定める語り手と、語られる対象者が同一人

物なのである。しかも、自叙伝に手を染める時点で語り手が新たに「意味」を定め、それに基づいて自分の諸体験を配列するばかりではない。語り手は自分の歩んできた人生のさまざまな時点で、過去を振り返っては「意味」を見出し、未来に目を向けては目的を設定することによって、自分の人生の連関形成に自ら関与して来たのである。ただし、人生の過程で「意味」や目的の変更が繰り返され、そのつど連関把握の仕方も変わり、最終的にその「意味」が固定されるのは自叙伝が執筆される時点ということになる。こうしたかたちで、自叙伝に着手する以前に、その語り手は自らの諸体験の連関をすでに所有しているわけである。こうして、人生の連関を把握し叙述する課題は、「人生それ自身により半ば解かれてしまっている」というデイルタイの表現が生まれる。

人生の連関の探索者が、その人生の連関の形成者であるという点に、自叙伝の特殊性がある。こうした探索者と形成者の直接的な結び付きにこそ、デイルタイが自叙伝に、「生」を理解させてくれる最高の形態という高い評価を与えた根拠がある。

## 6. 結語

精神科学を自然科学から区別しその本質を定義するという長年にわたるデイルタイの哲学上の課題は、最晩年に自叙伝への高い評価に辿りつく。デイルタイは、「生」、「体験」、「表現」、「理解」の連関に精神科学の本質を見出すが、デイルタイが自叙伝に着目したのは、「生の過程」（人生の諸体験の連関）としての「生の表出」を生み出す人間と、それを「理解」する人間とが同一であるという点であった。「理解」する主体と「理解」される客体の格別に近い関係、こうした「理解」のあり方の特殊性こそが、デイルタイの自叙伝への並外れて高い評価を生んだのである。

さらに、自叙伝における自分の人生に対する自己省察は、歴史洞察の基礎であるとデイルタイは位置づける<sup>28)</sup>。すなわち、自叙伝における人生把握は、歴史的理解と解釈の雛形と見なされるのである。ところで、デイルタイにおいて、精神科学が扱う精神的世界は歴史的世界とほぼ一致する。なぜならば、精神科学の対象である「生の表出」＝「生の客観態」は人間によって作り出されたものであり、その限りにおいて歴史的な所産だからである<sup>29)</sup>。したがって、歴史学は精神科学の基礎であり、歴史学の雛形が自叙伝なのだから、最晩年のデイルタイは自叙伝をまさに精神科学そのものの基礎と考えていたことになる。

### 註

- 1) G. Misch, *Geschichte der Autobiographie*, Bd.1/1, Das Altertum, Frankfurt a. M., 1949, S.3.
- 2) ウィリアム・C・スベンジマン『自伝のかたち—文学ジャンル史における出来事』船倉正憲訳 法政大学出版局、1991年、220頁。
- 3) G. Niggel, “*Einleitung*”, Die Autobiographie, hrsg. von G. Niggel, Darmstadt, 1989, S.2.
- 4) W. Dilthey, *Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. In: Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften, Bd. VII, hrsg. von B. Groethuysen, Stuttgart, 1958, S.200.
- 5) G. Misch, *Geschichte der Autobiographie*, Bd.1-4, Frankfurt a. M., 1949-1969.
- 6) 4)を参照。W. Dilthey, Ges. Schriften, Bd. VII, S.191-291.
- 7) *ibid.*, S.200.
- 8) *ibid.*, S.247.
- 9) *ibid.*, S.247.
- 10) *ibid.*, S.200-201.
- 11) W. Flach, “*Die wissenschaftstheoretische Einschätzung der Selbstbiographie bei Dilthey*”, Archiv für Geschichte der Philosophie 52, 1970, S.176-181. の分析を参照。
- 12) Dilthey, op. cit., S.228.

- 13) オットー・F・ホルノー『デイルタイ その哲学への案内』麻生建訳 未来社、1977年、93、214頁。
- 14) Dilthey, op. cit., S.195.
- 15) W. Dilthey, *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*. In: Wilhelm Diltheys Gesammelte Schriften, Bd. VII, hrsg. von B. Groethuysen, Stuttgart, 1958, S.80-81.
- 16) W. Dilthey, Ges. Schriften, Bd. VII, S.224-225.
- 17) *ibid.*, S.193.
- 18) *ibid.*, S.195.
- 19) *ibid.*, S.194.
- 20) *ibid.*, S.232.
- 21) *ibid.*, S.194.
- 22) *ibid.*, S.83.
- 23) *ibid.*, S.82.
- 24) *ibid.*, S.86.
- 25) *ibid.*, S.87.
- 26) *ibid.*, S.87.
- 27) *ibid.*, S.200.
- 28) *ibid.*, S.201.
- 29) *ibid.*, S.148.